

幼兒生活に於ける體現

K T 生

四歳から七歳位までの兒童の生活には體現インプレッションが行はれること頻りである、これは兒童が直接に行ふこともあるし又玩具に種々の役を振り當て、行ふこともある、而してこの時期の兒童を理解するにはこのお芝居の意義を理解するより他に手段はないのである。

この時期の劇的衝動は觀覽者を豫想しない、この時期及びこの時期以前の特色は意識の缺乏といふ點にある。成人者がこの時期の子供を理解することの尠いのは詰り彼等がこの時期を半無意識的に過し來つて當時の記憶を止むることが尠いからである。

この時期の衝動は扮装者の心内に起りつゝあるものを他に傳へんとするのではない、否寧ろそれ

とは反對に兒童は他人他物の心内にあるべしと想像したもの又は己が心内におぼるげに過ぎつゝあるものを明かに知らんと欲して斯く行ふのである。兒童の遊戯に於ける劇的衝動は彼等の世界を理解せんとする衝動に他ならないのである、好奇キュリオシティの衝動が早くも顯れて形を取つて居るのがこの劇的衝動である、而して兒童の心内に第一に構成される世界は他人他物の心から成立つのである。

生活と生活との間の引力は兒童の注意を惹くものを確定する上に於て大なる勢力を持つて居る、兒童は靜かに固定して居るものより動いて居るものを好む、兒童に取つては生きて居るものが當り前なのである、生きて居るものを中心として兒童の世界は構成せられるのである、兒童に取つては

すべてのものが生きて居るのである（必ずしもさうでないといふことが確證されるまでは）。それ故風、浪、蒸汽機關、犬、猫等すべてのものに對して兒童の共感的理解は皆同じやうに動いて行くのである。それ故又すべてのものに就て興味とするところはその生活である、それは内側は甚麼風になつて居るのだらう、それは一人で居ると何うなるだらう、何時お家へ歸るのだらう、若し自分がそのものだつたら甚麼氣がするだらうなぞといふことを知るのが兒童の大なる要求なのである。

この劇的、萬象有魂論的時期の好奇の對象となるものは全體の世界であり個人の世界である、輪廓でなくて本體、細部でなくて總括的意義——實質、その事物の歌——が要求せられるのである、末端や異同に興味が向いて行くのはずつと後の時期に於ていある。這麼風に知るといふことは一種の信仰の行爲である。想像するのである、現實を斥けるのである、それは又共感の行爲でもある、

兒童はこれによつてその友である他の兒童や鳥や石や草や小川や家具やを理解するのである。

兒童が物事を研究するには體現インパットネーションに依るのである、彼が知らんと欲するものに彼自身なつてみるのである、而してそれが如何に感ずるかを知るのである。この時期の兒童の本能は全體を掴むこと直覺によつて直ちにその研究の對象の核心に飛び込み而してそれを基として動くことである。兒童は畢竟一木一草に煩はされずに森全體を見得るのである。

兒童が斯く活潑に彼の經驗を體現インパットネーションすること及び彼の世界的内的性質の直覺をまぎ／＼と現し出すことの必要は彼の想像力が未だ微弱にして獨立して居ないとふ事實に依るのである。兒童は或る物に具體的の形を與へない内はその精神的の形を十分に把握することが出来ないのである。

兒童の體現インパットネーションの衝動は好奇キュリオシティの本能の性質を帯びて居る、後に現れ来るべき探究的、調査的、

分類的本能に於けるが如く、^{インパルシブネーション}體現の衝動に於ても、その世界を支配し兼ねて之をしつかりと握つてゐて彼の心と用とに一致させやうとする無意識的欲望が存するのである。

それから又^{インパルシブネーション}體現の衝動は部分的には屢々言はるゝ所の模倣的本能の一相でもあるけれどもそれは特殊の意味に於ての模倣である。外部行爲の模倣ではなく内部の精神を模倣し若しくは所有するといふことが兒童の望む所なのである。事實彼はすべての行爲を模倣する——馬の如く跳ねもすれば、猫のやうに這ひもする、犬のやうにワンワンと吠えもする、而してその興味は部分的には斯く行ふことそれ自身に存することは事實である——これは屹度面白いに違ひないのである、けれどもそれは決して單なる模倣のみではないのである。「お早う」も「お竹さん」も安樂椅子の軋む音も一樣にたいへん所謂鸚鵡返しに眞似して行く鸚鵡の模倣とは大いにその「趣き」を異にして居るのであ

る。彼を惹付けるものは單なる行爲ではなくて生活の乗物としての行爲である。

個性の核心を知るためにはその行爲を行うてみる^{イン}ことが重要な方法である。そのものになる最善の方法は——そのものが内部から何う感じて居るかを知るには——そのものゝ性格と職分とを自ら行うてみることである。兒童が牛をモーモーといひ、犬をワンワンといふやうに動詞を用ゐて居ること——この原理の洞察性を語つて居るものではあるまいか、斯くて兒童はその獨創になる多くの行爲を現すのである。彼の全體の演技は斯くして構成さるゝのである。

畫家がモデルをそのまゝに寫さず、彼の心内の形——モデルはこの形の助けとなるだけである——によつて製作をするやうに兒童は決して單に眼に見える動作を再現するのみでなく兒童がそれらの内に感得した性格を現す動作を再現するのである。

形よりも心を貴ぶがために衣裳には殆んど興味が維がれない、論ずる所は着物にあらすして動作にある。

勿論外觀を似せるといふことがインプリント・アクション體現の内部の意義を高める場合にはそれが體現の助けとなるといふことは無論のことである、その場合に於て旗や軍帽を被ることは決して無用ではないといふことが認めらるゝのである。

けれども普通強大なる想像力は單に眼に訴ふるのみなるすべてのものを蔑視するのである。

玩具——遊もてあそびに都合のいゝ大きさと形を備へたものは必要である、けれどもこれはそれをもつて遊び、又はそれに就て想像を加へることの出来るものであつて、それ自身に何事をか爲し得るやうなものであつてはいけない、これが重要な點である。

この時期の玩具は主として想像を懸けるべき掛釘であればよいのである。長方形の木片は牛にも

なれば安樂椅子にもなり、又汽車にもなつて常にその興行者インテリヤリを満足せしめ得るのである、故に寫實に過ぎれば却つて不便を來たすのである、牛なら牛といふ形を明かに備へて居るものを汽車と思ふには餘程の努力が必要となつて來るからである。

ポルカを踊つたり、「君が代」を歌つたりする人形はクリスマス朝十五分間位は兒童に非常に可愛がられる、併しこの場合に於ける兒童の受動的なる觀賞の興味が失せると同時にポロ籃の中へ投げ込まれるか解剖に附せられるかして了ふのである。

寸分の差異なき類似物はあまり重要でないばかりでなく、屢々損傷的である場合が多い、併し手頃の大きさと形とを備へたものは何でも兒童の玩具となり得るのである。

この時期に於て、毎日體現の練習を行うたならば體現の力を十分に養成することが出来るであらう。

インパッション
體 現

の衝動は人々をあるがまゝに觀察する共感的洞察力と他人の眼を以て見、他人の神經を以て感ずる直覺的共感とを發達せしめる。觀察力は假説を證明し又は排斥することが出来る、しかし想像力が無い時はその排斥すべき假説さへも存在しないのである。原因を想像すること、假説を設けること、些かでも豫知し得ることは全く想像力の領域に屬するのである。而して想像の眞は洞察力に依るのである、自身その想像する所のものとなつてそれが如何に働くかを感じる力に依るのである、而してこの想像力は劇的の遊戯を行ふことによつて成長して行くのである。

インパッション
體 現
兒童はその體 現に於て、意識的に研究を行つて居るのではない、彼の衝動はたゞ自分の氣に入つたものとならんとすることに外ならないである。

或物になるといふことも動作するといふことも知るといふこともこの時期に於ては未だ判然と分

たれてはゐないのである。兒童のこの状態は丁度夢の中に現れる人の状態に似て居る、夢の中の人とは或る性格を面白いと思ふと同時に自分がその性格となつて了ふのである。

或物を知ることと或物になることとはこの時期の兒童にとつては同じことではあるがその間に多少の差異がないでもない。或る體 現に於ては好^{キユリオシテイ} 奇の要素が於^{より}多分に存し、或る體現に於てはそのものたらんとする要求が於多分に存するのである、兒童が馬や四輪馬車になりたがつて居るのは高々半日の間位である、然るに自分の好む英雄や何かには數週間も續けてなつてゐたがるものである、兒童はその間ナポレオンならナポレオンのつもりで居る、而してナポレオン君と呼び掛けられ、ば至極恐悦である。フレーベルの騎士の遊びはこの點に關して流石に達識を示して居ると言はなければならぬ。

何はしかれ兒童が何處に居る時でも、幼稚園に

於ても家庭に於ても、又誰が兒童の世話をして居る時でも、インハイフナーション體現といふことがこの時期の兒童の

成長に缺くべからざるものなることを忘れてはならぬ。(Joseph Lee: Play in Education に據る)

文展の『子供』の繪

倉 橋 惣 三

一昨年の秋、ふと斯ういふことを始めてから、秋毎に美術展覽會に、子供を題材とした繪及び彫刻を拾ひ出して、之れに勝手な妄評を加へることが、私の呑氣極まる一つの恒例となりました。但し私自身にとつては、必ずしも呑氣一方のことではありません。一體『子供』を如何に取扱ふかといふことは、今日の藝術で別段特殊問題として研究せられる程のことにはなつて居ません。山水あり、靜物あり、動物あり、人物あり、また肖像畫美人畫の名のある中に、子供畫といふものが敢て特別な位置を占めては居ません。私達には之れが

甚だ物足りないのです。私達の考へからいへば、『子供』は其の形式に於ても内容に於ても、頗る豊富なる藝術的主題となるものです。換言すれば専門的な『子供』畫家が、立派な藝術上の一分野を作る筈のものなのです。私は始終此の一分野の顯現を待ち望んで居ます。そして、美術展覽會の開かるゝ毎に、之れを注意深く探すのです。それからまた、私は、自分の専門の立場から、藝術家によつて觀られ、藝術家によつて表顯せられて居る『子供』の中に、大に學ぶべき貴い資料のあることを信じて居ます。そして、あらゆる方面の兒童觀